

歴史は現在の戦争の理解に どのような意味を持つか

塩川 伸明

Shiokawa Nobuaki

[要旨]

ロシア・ウクライナ戦争（ロシアによる侵略戦争とウクライナによる防衛戦争）に関して、その歴史的背景を論じたり、あれこれの歴史的な先例とのアナロジーを見出したりする議論は数多い。ロシア帝国にせよ、ソ連時代にせよ、今日と類似する先例を見出すことは容易だが、そこから「ロシアは／ソ連はこういう国だから、こういうこと（侵略・膨張）をするのだ」と論じるのは安易な宿命論に結びつきやすい。これに対し、歴史の専門家たちの間では、類比されがちな歴史上の先例が実は現在と同じではないということを指摘し、安易なアナロジーによる説明を戒める議論がしばしば提起されている。歴史と現代は直結するものではなく、過去の歴史からいきなり現在の状況を説明することはできない。だが、歴史を丁寧に見ていくことは現在の状況を精緻かつ多面的に理解することを可能にする。歴史研究の意義はそこにある。

今や3年目に入ろうとしているロシア・ウクライナ戦争（ロシアによる侵略戦争とウクライナによる防衛戦争）は多くの人々の関心を引きつけ、多様な問題提起を生み出している。その一つとして、戦争の歴史的背景を論じたり、今回の戦争のアナロジーをあれこれの歴史的な先例に求めたりする議論も多数にのぼる。

ロシア帝国にせよ、ソ連時代にせよ、今日と類似する先例を見出すことは容易である。そこから、「ロシアは／ソ連はこういう国だから、こういうこと（侵略・膨張）をするのだ」と論じる人は数多い。だが、過去と現在の間になにがしかの類似性があるからと言って、それが直ちに現状を説明すると結論づける議論にはいささか安易なところがあり、固定的な宿命論に結びつきやすい。ロシア帝国の歴史やソ連の歴史を振り返る際に、現在の地点から光を投げかけることは、これまで気づかれていなかった歴史のある側面を浮き立たせるのに役に立つが、だからといって歴史を現在に関する議論のために利用するのは歴史を深く理解するものではないし、現状の深い理解のためにも役立たない。

歴史の専門家たちの間では、類比されがちな歴史上の先例が実は現在と同じではないということを指摘し、安易なアナロジーによる説明を戒める議論がしばしば提起さ

れている。古い時期から順にいくつかの事例を挙げるなら、モンゴル＝タタールによる支配の経験から一挙に現代ロシアの「専制」を説明する議論に対して、中世史家の宮野裕はむしろモンゴル支配から脱却する中でモスクワ大公国が成長した過程に注目すべきだと指摘している。これは古い歴史の現代的意義を否定する趣旨ではなく、歴史と現代のつながりを新しい角度から考えようという提唱ととることができる。

近代史上の重要トピックであるウクライナ民族の形成に関しては、「ロシア人とウクライナ人は一体の民族だ」という語りと「ウクライナ人は一貫してロシア人とは別個の民族であり続けてきた」という語りが対抗してきた。しかし、若手のウクライナ史研究者村田優樹は、歴史家の課題はそのどちらが正しいかを判定することではなく、むしろそれらの言説がどのように形成されてきたか、そしてそれらの言説が今日の人々の意識にどのような刻印をもたらしてきたかを跡づけることが重要だと論じている。これも歴史と現代の関係を新しい角度から考えるうえで重要な意義を持つ指摘である。

より現代に近いソ連時代の歴史は、一面では今日と連続していながら、他面では断絶しているという複合性があることを多くのソ連史研究者は指摘してきた。例えば、ソ連の対外政策には「過剰防衛」的性格——当事者の主観においては受身的・防衛的でありながら、外から見れば膨張的・侵略的と見える——が特徴的だが、現代ロシアはそれと似た面と微妙に異なる面とがあり、その関係の解明は現代史上の重要な課題である。

歴史それ自体とは別に、現代の人々が過去をどのように振り返るかという問題は、「記憶の政治／歴史の政治」という形で、現代政治の重要な構成要素となっている。ウクライナの例に即して言うなら、一つにはいわゆる「ホロドモール」評価（スターリンの圧政のあらわれか民族的ジェノサイドか）が大問題であり、またもう一つにはバンデラをはじめとするウクライナ民族主義者組織（OUN）およびウクライナ・パルチザン軍（UPA）の評価が人々を引き裂く争点となっている。「記憶の政治／歴史の政治」が現在の戦争の直接の原因をなしているとは言えないが、その一つの重要な背景要因を構成していることは確かであり、また戦争の過程でより一層深刻なものとしてクローズアップされてきた。そうした現実を捉えるためには、歴史に関する言説がどのように形成されたり変遷したりしてきたかを、それ自体、歴史の一局面として研究しなくてはならない。この問題については橋本伸也、浜由樹子、立石洋子らが精力的に取り組んでいる。

以上、中世史、近代史、現代史のいくつかの事例を取り上げてきたが、最現代史（いわば「現在史」）について考える際に最も重要なのは、言うまでもなく2014年の経緯（マイダン革命、クリミア併合、ドンバス戦争の始まり）である。これらはしばしば2022年2月以降の本格戦争の序曲とみなされている。それは大まかには当たっている

が、それだけで現在の戦争を説明できるわけではない。これまでの議論は、①「マイダン革命は民主化革命であり、それを恐れるプーチン政権はクリミア併合を手始めにウクライナへの侵略を始めた」とする立場と、②「マイダン革命はアメリカの謀略によるクーデタであり、ロシア語系住民への迫害が始まったため、ロシアは防衛的関与を余儀なくされた」という2つの立場に分かれている。しかし、そのどちらも歴史的検討抜きで政治的議論にとどまっている。

この問題に歴史的に取り組もうとするなら、この間に種々の複合的変動があったことを念頭において、それらの局面を丁寧に跡づける必要がある。2013年11月にマイダン革命が始まった時点では、政権への抗議は政権転覆まで視野に入れてはおらず、その運動の基本性格は平和的な市民運動だった。しかし、そうした状況は時間の経過の中で大きく変化した。

元来平和的だった運動が暴力的色彩を帯びたのは2013年11月末に政権側が強硬な取り締まり方針をとり、12月以降に対決が高まったことを契機としている。もっとも、12月段階の暴力はまだしも限定的なものだったが、2014年1—2月には急速に暴力がエスカレートし、多くの死傷者を出すに至った。詳しい経過に立ち入る余裕はないが、一つには政権側の対応が強硬路線と妥協路線の間を揺れて一貫性を欠いたことが反政府運動の急進化を促し、もう一つには反政府運動の一翼をなした極右勢力が暴力拡大に寄与した。極右は量的には少数だったが、混乱した情勢の中で実数以上の影響力を持った。また極右のイデオロギーは他の人々にそのまま共有されたわけではないが、彼らが犠牲を恐れずに権力への対抗暴力を振るうさまは他の人々の共感を集め、彼らは「民主化」運動から排除されなかった。

地域的個性について言うなら、西部諸州では既存の国家制度が揺らぎ、州行政機関の実力占拠とか、正規の警察機構にとって代わる自警団の組織化などが進行し、その趨勢はキーウにも及びつつあった。こうした「暴力革命」的な闘争スタイルは、まもなくドンバスの「反マイダン」活動家たちによって、いわば逆方向から模倣されることになる（「彼らがやっていることを、われわれもやるのだ」という論理）。

他方、相対的にロシア語系住民の比重の高い東南部とクリミアについては、ウクライナ民族主義への反撥ないし「親口性」が見られたが、その度合いは一様ではなく、一種のグラデーションがあった。ごく大まかに図式化するなら、相対的な「親口性」の度合いは、

全ウクライナ平均<東南部諸州（ドンバスを除く）<ドンバス2州<クリミア
の順だった。こうした差異はロシアの介入の容易さ／困難さの度合いを規定する。クリミアではロシアへの移行にほとんど抵抗がなく、ロシアへの併合は短期間に平和的に進行した。これに対し、ドンバス以外の東南部諸州では、ある程度の「親口性」があるとはいえ、それは既存の国家制度を覆すに足るほど強烈ではなかったから、この

地域を併合する試みは成功可能性がなく、一時期提起された「ノヴォロシア連邦」論もすぐに撤回された（2022年にはドンバスとクリミアを結ぶという軍事的意義から、ザポリージャとヘルソンに限定した征服の試みがなされた）。このようにクリミアと東南部諸州（ドンバス以外）を両極においた場合、ドンバス2州はその中間であり、力関係がどちらに優位とも定めがたい状況があった。この地で紛争が軍事的衝突の形をとった一因は、そのような状況にあった。

もう一つ重要だったのは、それまでドンバス2州の統治に当たっていた地域党がマイダン革命の過程で瓦解し、一種の権力空白が生じたという事情である。その空白を衝く形で、共産党の中下級活動家たちや過激ロシア・ナショナリストたちが「人民革命」を引き起こし、州権力を奪取した。このようにして形成された「人民共和国」は、ロシア政権にとって「扱いにくい味方」としての性格を帯びた。そのため、ロシア政権は当初、非公式な形で「人民共和国」を支援するにとどまっていたが、やがて前面に出ざるをえなくなり、8月末にはロシア正規軍が投入された。

他方、ウクライナ政府にとって、「右派セクター」などの極右やアゾフ連隊はこれもまた「扱いにくい味方」であり、ドンバス戦争とりわけその初期段階は双方の側の非公式暴力部隊の存在に特徴づけられた。その後、戦闘は膠着状態に移行し、数年間の低強度紛争の時期を経て2022年2月以降の本格戦争へと至った。このように見てくると、先に挙げた①の見方も②の見方も一面的だということは明らかである。

中世史・近代史・現代史・最現代史のいくつかの側面に触れてきたが、歴史と現代は直結するものではなく、過去の歴史からいきなり現在の状況を説明することはできない。だが、歴史を丁寧に見ていくことは現在の状況をより精緻かつ多面的に理解することを可能にする。歴史の役割はそういう点にあるのではないだろうか。

しおかわ・のぶあき 東京大学名誉教授
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/salzbach.in.hoya@kud.biglobe.ne.jp>